

(実践報告)

## 在宅看護実習調整会議の振り返り —在宅看護実習における学生の学びと指導の検討—

村山晃子<sup>1)</sup> 内藤恭子<sup>2)</sup>

### I. はじめに

少子高齢化が進む中で、地域医療構想の実現や地域包括ケアシステム構築の推進に向け、人口および疾病構造の変化に応じた適切な医療提供体制の整備が必要とされている。厚生労働省(2019)は、入院期間の短縮化や、医療機器の発達等による在宅医療・外来医療の進展、地域包括ケアシステム構築の推進等の中、療養する人々の生活の場は自宅や介護施設など多様化してきており、看護師には地域に暮らす療養する人々を生活者として捉え、看護サービスを提供する役割が一層求められるとしている。

看護基礎教育においても、2022年度からの新カリキュラムでは、「多様な場における看護実践に必要な専門知識」、「多様な場の特性に応じた看護」が、在宅看護に関する内容に位置づけられ(文部科学省, 2017)、在宅看護領域に求められる課題は益々拡大することになる。今後その教育内容の整備に伴い、在宅看護における実習指導を充実させることは必要不可欠であり、そのために、臨地実習指導者(以下、指導者とする)と教員が学生の学ぶ過程を共有し指導に関わる連携・協働が、学生の学びを深めるために重要である(中村ら, 2014)。

本学では、「地域で療養する人々やその家族を理解し、その人らしい在宅生活の継続に向けた在宅ケアの実践を学ぶ」目的で、学生は訪問看護ステーションにおいて2週間の在宅看護実習を行っている。その実習形態は、個人宅への訪問であることから、対象者の了解や訪問日程との調整など教員が学生とともに訪問に同行するには困難が伴う。従って、訪問先での在宅看護のあり方や援助の指導は指導者に委ね、学生の経験内容を理解し、対象に応じた看護展開の指導は主に教員が行うべく役割分担が行われている。訪問先での学生の実習状況を把握できない教員はもちろん、学生に有益な指導ができた実感の少ないとされる訪問看護師(東海林ら, 2019)双方にとって、学生の学びを共有し連携することは、在宅における学生の学びを意味づけ深化させるための教育的意義が大きいと考える。下吹腰ら(2019)は、訪問看護ステーション実習の研究動向から、学生の実習の学びについての報告が多く、教員と指導者との連携や協力体制についての研究が少ないこと、また今後の社会の変化から訪問看護ステーションに求められる役割が期待されており、在宅実習指導の質の担保や向上のため、両者の連携や協働は今後の検討課題であると述べている。

本学看護学科では、実習指導の内容充実や指導者と教員双方の連携強化のため、設立以来、毎年度実習終了後、10カ所以上の実習施設の管理者または指導者と、「在宅看護実習調整会議」を開催している。この会議では、学生の学びの内容を大学より報告し、実習施設の指導者より学生の学習の様子や教育的課題について検討する場としている。本会議は、他領域のように病院や施設に向いて行う調整会議や実習報告会議とはスタイルが違い、指導者と教員が大学で一堂に会し行う方法であり、本学の在宅看護実習独自の動きである。また毎年この会議における指導者の参加率は高く、本学の実習指導に対する指導者の教育への理解と協力を得ながら実習体制が整えられてきている。今後も本会議が指導者と教員の交流・連携を深め指導体制の強化に繋がる有意義な場となるよう、「2018年度在宅看護実習調整会議」で報告した内容と、指導者より挙げられた意見をまとめ振り返り、今後の実習指導および連携について検討したので報告する。

1) 朝日大学 保健医療学部 看護学科

2) 名古屋学芸大学 看護学部 看護学科

## Ⅱ. 在宅看護実習調整会議の内容

「在宅看護実習調整会議」は、2018年3月14日(火) 11:00～13:00、本学10周年記念館1階、図書館クリエイティブワーク・エリアにて第一部を行った。当日は、12カ所の実習施設のうち、11カ所12名の指導者の出席のもと、下記の内容について議事を進行した。

1. 領域長および領域担当者より挨拶
2. 平成30年度の在宅看護実習の成績評価概要の中間報告
3. 在宅看護実習における学生の学びの内容について、資料を作成し教員より報告(表1)
4. 各実習施設指導者からの意見(表2)
5. ご意見に対する返答、次年度への課題等
  - ・学生の体調不良については指導者と相談しながら実習を進めたい。
  - ・学生の事前学習の内容や理解については教員側で確認し、指導の内容を検討したい。
  - ・実習中の上着、防寒着などの持ち物については、忘れないように指導したい。
  - ・訪問看護実習における看護技術に関連し、学生が血圧測定等について不安がある場合は再度練習するように促す。
6. 昼食・歓談  
第二部は昼食を交えて歓談し、互いの懇親の場となった。

表1. 在宅看護実習の学びのカテゴリ

在宅療養の特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・その人らしい生活の継続</li> <li>・住み慣れた空間で生活する快適さ</li> </ul>
訪問看護師の役割	<ul style="list-style-type: none"> <li>・信頼関係の構築</li> <li>・自己決定の支援</li> <li>・多面的な情報収集</li> <li>・療養者や家族のニーズに沿った支援</li> <li>・経済面を考慮した援助の工夫</li> <li>・訪問時間内のケアの優先順位の判断</li> </ul>
多職種連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>・職種間の情報の共有</li> <li>・療養者の望む生活に向けた目標の統一</li> </ul>
看護師として大切なこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・療養者・家族の価値観や思いの尊重</li> <li>・療養者の尊厳を守るケア</li> <li>・多様な価値観の受容</li> <li>・生活者としての療養者の理解</li> <li>・退院後の生活を見据えた視点</li> <li>・死について考えること</li> <li>・態度・マナー</li> </ul>

表2. 指導者からの意見のカテゴリ

学生の学習状況について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習態度の積極性に関する個人差</li> <li>・学生カンファレンスの重要性</li> <li>・記録の文章表現</li> <li>・訪問時の挨拶</li> <li>・家族や生活を捉える訪問看護の学び</li> </ul>
実習指導における配慮点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生の体調確認</li> <li>・訪問先での会話</li> <li>・訪問場面の事後の説明</li> <li>・訪問後の質問の場</li> </ul>
実習指導で困難な内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個々の学生の学力の差</li> </ul>
大学への要望	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生の体調不良時の実習</li> <li>・事前学習の内容</li> <li>・訪問時の服装</li> <li>・訪問時の血圧測定</li> </ul>

## Ⅲ. 在宅看護実習調整会議の振り返り

本会議は在宅看護実習の学生の学びの内容を報告し、学生の学習内容を指導者と教員双方で共有する場になったと考えられる。また学びの内容の報告により、学生の個々の理解度は様々であるが、学生が実習目標を達成することに繋がった学習内容を具体的に示し両者が共通理解できたのではないかと考える。

中村ら(2014)は、学生が実習から多くの学びを得ていくためには、大学教員と臨床指導者が学生の学ぶ過

程を共有し指導に関わることで、その前段階として学生が安心して実習に臨むことができるような環境調整が必要であり、これらを包含した連携・協働の重要性を述べており、本会議が連携・協働の一端を担っているため、今後も継続した会議開催が、本学の実習指導の深化には有効であると考えられる。

また会議後半において指導者より実習指導に対する率直な意見や考えの発表を受け、実習中の学生への関わりや配慮、指導上の困難と感じる内容について明らかになった。訪問看護実習という特性上、病院や施設への実習とは異なり療養者の生活の場所へ同行するということから、マナーおよび態度やコミュニケーション力の重要性、積極的な学習姿勢がより求められる。そのため、指導者が学生の実習姿勢を細かく気にかかけ、訪問先で療養者や家族と会話できるような場づくりの提供や、訪問事後に説明を加える等により、学生が訪問看護の実践内容をより深く理解できるような配慮をしていることが明らかとなった。東海林ら（2019）は、在宅実習指導に関わる訪問看護師へのインタビュー調査の結果から、実習指導上の困難として世代間のギャップ、同行訪問への負担、実習指導の難しさ、自分なりに行う実習指導への不安の4つのカテゴリーを挙げており、本会議で挙げられた指導者側の意見や考えと重なる部分があると考えられる。

在宅看護実習指導教員は、訪問看護ステーションにおいて学生指導を行うが、同行訪問中の学生の様子やコミュニケーションの実際、学習態度を把握することが難しい状況である。そのため実習期間中だけでなく本会議により、両者の連携が密になり指導内容や方法について具体的な検討に繋がると考えられる。中澤ら（2018）は、実習指導者と教員の交流と連携を図る目的での「臨床指導者カフェ」を開催し、小グループに分かれ、学生指導の困りごとについてフリートーキングの場を企画し、他施設の指導者や教員との交流から指導方法や悩みの解決に繋がり今後の指導や実践に有効であったことを報告している。このことから、今後も本会議を継続的に開催するとともに、会議内容を指導者と教員の学びの共有に留まらず、それぞれ立場や思いから学生指導について気軽に話せる場づくりとしても検討し、より指導者と教員の連携・協働の機会となる会議の開催が必要であると考えられる。

本研究に関連して、開示すべき利益相反状態は存在しない。

## 文 献

- 厚生労働省（2019）. 看護基礎教育検討会報告書（案）第10回看護基礎教育検討会報告書（案）  
<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000552461.pdf>, 2019-11-25.
- 文部科学省（2017）. 看護学教育モデル・コア・カリキュラム ～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を旨とした学修目標～ 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会.  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/\\_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/13\\_97885\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/13_97885_1.pdf), 2019-12-23.
- 中澤洋子, 中島泰葉, 作並亜紀子, 塚本陽子, 鈴木朋子, 斎藤千秋, 佐々木俊子, 段亜梅, 笹木葉子（2018）. 臨地実習指導者と教員の交流会を行って：臨床指導者カフェの取り組み. 名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター, 2(36), 75-77.
- 中村伸枝, 竹中沙, 仲井あや, 上林多佳子, 若菜幸子, 和住淑子, 黒田久美子, 河部房子（2014）. 学生の看護実習を通じた学びの特徴と大学教員と臨床指導者の連携・協働のあり方. 千葉大学大学院看護学研究科紀要, (36), 21-26.
- 下吹越直子, 八代利香（2019）. 在宅看護論における「訪問看護ステーション実習」の研究の動向と課題. 看護科学研究, (17), 45-50.
- 東海林美幸, 古瀬みどり, 森鍵祐子, 小林淳子（2019）. 在宅看護実習で訪問看護師が感じる実習指導上の困難とその対処. 日本看護研究学会雑誌, 42(4), 819-828.